

ロバート・オウエン思想についての断想

吉田明弘

要旨：産業革命期のイギリスでは、労働者酷使が著しかった。そんな中、労働者保護の観点を持っていたのが、後に空想的社会主義者と呼ばれるロバート・オウエン（Robert Owen）である。具体的には、年少児童労働者の労働時間の短縮、性格形成学院の創設、労働者住宅の供給、協同組合の設立などを行った。

大方の資本家と異なり、なぜオウエンは労働者に配慮する経営方針を採ったのか？ そのゆえんを本論では明らかにしたい。

オウエンは生産手段の一部として労働者をとらえていた。労働者は「生ける機械」である。「金銭的利益」のためには、その「生ける機械」のメンテナンスが重要だと経営者オウエンは考えた。オウエンが、「生ける機械」に注意を払ったのは、かような理由からである。

本論では、オウエンが著した『新社会観』（1813年）、そして『オウエン自叙伝』（1857年）をもとに、彼が「苦闘」を余儀なくされた労働者の実態を取り上げ、経営者オウエンのファンダメンタルな課題を明らかにする。

さらに、唯物論と功利主義の複合的思考によって形成されるオウエン思想の片鱗に迫るとともに、オウエン思想の核心である「アソシエーション（association）」の現代的意義についても論じる。

キーワード：産業革命、生ける機械、金銭的利益、唯物論と功利主義の複合的思考、アソシエーション

問題意識

2018年11月10日に京都で開催された「ロバート・オウエン協会創設60周年記念研究集会」において、中川雄一郎会長（明治大学名誉教授）と意見交換する機会に恵まれた。

短い時間であったものの、会長の認識は示唆に富んでいた。

筆者は、次のように中川先生にたずねた。

「大方の経営者が労働者を酷使している時代があって、なぜオウエン（Robert Owen）は労働者に配慮する経営をしたのでしょうか？」

長年、筆者が疑問に思っていたことを、会長にぶつけた。

それに対し、中川先生はこう答える。

「オウエンは、経営者として当然のことながら『金銭的利益』を追求した。労働者を『生ける機械』として考えていたオウエンは、その活用が『金銭的利益』の増加につながるという発想から、『生ける機械』の保護すなわち労働者の保護を行ったのではないか」

先生の言葉を用いながら要点を説明すると上の通りとなる。

確かに、労働者は「生ける機械」である。その効率の活用が、生産性の向上につながり、結果経営者は「金銭的利益」を享受することができる。ゆえに、「生ける機械」の労働に対するモチベーションを高め、彼らの能力を最大限に引き出す努力は、経営者として当たり前の行為だ。

労働者の酷使は、一時的な利益の増大を生むが、長期的にみれば「生ける機械」の性能の低下につながる。オウエンは、労働者の保護を徹底的に行うことにより、「生ける機械」の持続的な性能維持を図ろうとしたのではないか？

オウエンが着手した年少児童労働者の労働時間の短縮、性格形成学院の創設、労働者住宅（社宅）の供給、協同組合の設立など、一連の労働者保護の取り組みは、「生ける機械」の品質の維持と、さらなる性能の向上に寄与する。

「（オウエンの工場では）他のどこの工場よりも高い賃金を払い、労働時間も短く、労働者のためにりっぱな住宅を建て、その生活費を切り下げる

ためには、会社が金を出して物資配給所を作っていた。(中略)多くの経費を支払いながら、会社は黒字であるばかりでなく、その製品である綿糸の声価は高く、争って買われていた¹⁾という本位田祥男の指摘は、「生ける機械」の再生産が、「金銭的利益」に帰結する証左である。

中川会長の弁によれば、「オウエンは望ましい産業社会のあり方を示した」と。

上述のオウエンの発想は、「産業革命期の機械制工場という一つの坩堝のなかで、彼自身の苦闘を通じて醸成されていった²⁾」と考えるのが妥当だ。産業革命によるイノベーション(技術革新)は、労働のあり方を大きく変化させた。オウエンはその実情を目の当たりにし、経営者として「苦闘」していたと思われる。

そこで、本論では、ロバート・オウエン著／五島茂訳『オウエン自叙伝』(岩波文庫、1961年)をテキストに、オウエンが「苦闘」を余儀なくされた労働者の実態を取り上げるとともに、経営者オウエンのファンダメンタルな課題を明らかにする。

金銭的利益と生ける機械

中川会長のコメントに出てきた「金銭的利益」と「生ける機械」は、オウエンが著した『新社会観』(1813年)において、オウエン自身が用いた言葉である。

揚井克巳訳『新社会観』(岩波文庫、1954年)をもとに、該当箇所を引用する(なお旧字体は新字体に改めた)。

ちなみに、この本は、同業の経営者を対象に、その啓発を目的としたものである。

【私は金銭的利益をえようとする一製造業者であります。】(16ページ)

【綺麗で、清潔で、よく整頓さえ、そして常に修繕のゆきとどいた状態にある機械装置と、不潔で、故障のままで、不必要な摩擦を防止する術もなく放置され、従って修繕されずに動いている機械装置とでは、異なった結果を生ずる。】(17ページ)

【前の場合には、全経済と全管理は良好であり、すべての作業は円滑・整然かつ成功裡に進行します。後の場合には、逆の結果が生じざるを得ない。】(17ページ)

【機械の状態に対する適当な配慮が、かかる有益な結果を生じうるとするならば、それよりも遙かに素晴らしい構造をもっている諸君(筆者注：工場経営者)の生ける機械に対して、同じ注意をばらうことから、同じ結果を期待してはいけなんでしょうか。】(17ページ)

【生ける機械について、その精巧な機構について、その自己洞察力について、諸君が正しい知識を獲得される場合には、また適当な主発条(筆者注：バネのこと)が生ける機械の種々の運動に応用される場合には、諸君は、それらの機械の真値を知るようになり、諸君の思いを生命なき機械から生ける機会に一段と頻繁にむける気になるでしょう。そして諸君は、生ける機会が金銭的利益の大増加をもたらすように容易に訓練指導しうるものであると同時に、彼らから深甚な感謝をも受けることを発見されるでしょう。】(17～18ページ)

以上の記述からわかるように、オウエンは生産手段の一部として労働者をとらえていた。「金銭的利益」のためには、機械同様、労働者のメンテナンスが重要であるとオウエンは主張する。

つまり、オウエンは「金銭的利益」の追求を目的に、「機械の状態に対する適当な配慮」を行い、「生ける機械」に対する「訓練指導」をしたのであった。

しかし、その「適当な配慮」は、「(一)労働時間の短縮。(二)慈善院や労役場からの幼児の年期的雇用の廃止。最低労働年齢の十歳への引き上げ。(三)労働者に対する住宅や食料や衣料の安値な供給。(四)村全体を衛生的かつ快適ならしめるための整備改善。(五)村民の悪習の矯正。(六)村民及びその子弟の教育³⁾」と工場内での労働環境改善にとどまることなく、労働者の置かれている生活状況全体を改善するいわば社会改良の側面を持っていた。

土方直史は、「個別企業の経営原理（哲学）としてだけではなく、広く社会一般に適用できる普遍的な社会改革原理（哲学）として考えた」「単なる開明的な工場経営者にとどまらず、社会思想家でもあることの自己主張を暗に意味していた」⁴⁾と、『新社会論』を解説する。

まとめると、「同業者に対して、『生命なき機械』よりも『生ける機械』たる労働者へのより深い配慮を促し、それが教育により『合理的人間』となり、労働力の質の向上をもたらして、経営としても収益を生むと注意する企業者的アプローチ」⁵⁾をオウエンは行ったのである。

資本家として、「金銭的利益」の追求は至極当然であり、オウエンの関心がそこにあったのは事実だ。しかし、「企業者としての生産管理・労務管理の新志向のなかで、肌を感じとって発見したのは、工具たちの条件改善による反応が、彼らに人間にひびいてゆく」⁶⁾姿を目の当たりにし、確信をもって「生ける機械」に対する「適当な配慮」の必要性を認識したというべきであろう。それが、結果として「金銭的利益」を生む事実の中で、オウエンの性格形成理論は育まれていったといえる。

イギリス産業革命の様相

イギリスの近代史に詳しい川北稔は、「産業革命の時代には、賃金が安いから、女性と子どもがたくさん使われてきたと言われてきました。それはその通りです。女性や子どもが、低賃金で危険なところで長時間労働をさせられるから、かわいそうだということで、工場法ができ、福祉政策ができ、社会主義が出てくる。ふつう、この時代の歴史は、教科書的にはそのように説明されます。しかし、じつのところ、産業革命時代の女性や子どもの労働が、異様に悲惨であったかは、生活水準論争の重要な議論の分かれ目なのです」⁷⁾との見解を示す。

確かに、産業革命によるイノベーションが、生産の拡大と消費の増加をもたらし、それ以前の生活をドラスティックに変容させていったのは事実である。ある意味においては、「豊かな生活」の享受が可能になったと解することもできる。

しかし、「女性や子どもの賃金を低く抑える一方で、男性労働者の賃金が『家族賃金』化して、妻や子どもを養うに足りる所得に上昇していった」ものの、「産業革命の『勝ち組』と『負け組』を生み出して」⁸⁾といった側面は否めない。つまり、産業革命のもたらす利益は、極めてかぎられたものであり、「幼児の死亡率は高く、身長伸びは停滞気味で、低下することもあった。健康や福祉における高度なリスクと比べた場合、わずかな対価にすぎなかったといえる。それは、多くの同時代人にとっては、生活水準の改善や向上という変化を認識できないほどに、日々の暮らしが貧困に満ちていた」⁹⁾という。

さて、当時の工場労働者の実態を、眞淳平『人類の歴史を変えた8つのできごとⅡ』（岩波ジュニア新書、2012年）の記述から引用しておきたい。

オウエンの眼前にあったのは、次のような様態であった。

紡績工場では、労働者が1日10時間以上働くことは当たり前でした。ミュール紡績機を使う工場では、労働者が3人1組で働くことが原則です。紡績機を管理して、綿糸をつくり出す紡績がスムーズに行くように調整する精紡工がひとり。切れた糸を継いだり、紡錘に巻かれた糸を抜き取りたりする糸継工がふたり。

糸継工として10歳前後の子どもが働くこともよくありました。

彼らはその長い労働時間の間、監督官の厳しい管理の下で、手を休めることができません。

さらに彼らは、仕事の間中、機会に沿って左右に動く必要があったため、研究者の計算によれば、一日の移動距離が30キロメートル以上になる労働者もざらだったといえます。

また、工場の床は油で滑りやすかったため、彼らは裸足で仕事をしました。そのため、足に木の板のとげを刺すけがは日常茶飯事です。機械に指をはさまれ、大けがをする労働者も絶えません。さらには、誤って作動した機械に体をはさまれ、命を失った子どもの労働者がたくさんいたことも報告されています（『資本論』と産業革命の時代）。

くり返しになるが、産業革命がもたらした恩恵を受ける者(勝ち組)がいたっぽうで、疲れを知らない機械に拘束された子どもたちが、危険と隣り合わせで働いていた。未来の労働力たる児童が萎靡することは、産業社会全体としての損失であり、資本家にとっても「金銭的利益」の損失につながる。

オウエンは、工場経営者の一人として、そのような自覚のもと、労働者=生ける機械のメンテナンスを真剣に考えていたと思われる。

『オウエン自叙伝』にみる労働者の実態とオウエンの苦闘

ロバート・オウエンが1857年に著した『自叙伝』の中から、オウエンの目に映った労働者のありていな姿を取り上げ、「生ける機械」の扱いをめぐり、オウエンが「苦闘」した記述を紹介する。

この『オウエン自叙伝』は、彼が85歳の時に出版したものである。

すでに断ったが、ここでは五島茂訳の『オウエン自叙伝』(岩波文庫、1961年)をもとにする。

【この人びとは悪い状態に囲まれていて、これらの悪い状態は彼らの上に力強く働きかけ、彼らの性格や行為をゆがめていた。(中略)この人びとはどこからでも誘いさえすれば手早く掻集められてきた人びとであって、その大多数が怠惰で・のんだくれで・嘘つきで・誠がなく、しかも偽信心家であった。】(110~111ページ)

【人びとはのんだくれで不道德であった。(中略)盗みなどはごく普通のことで、おびただしく途方もない程にまで行われた。】(111ページ)

【最大多数の人びとの無知・迷信およびその結果としての不道德行為と悪習。彼らが受けなければならなかった長い日々の労働。彼らが自家用に買わなければならなかった物品すべての質の粗悪と高価。生まれてから幼時・少年時代を通じてその子供を養育し訓練するための家屋内の設備の悪さ。】(119ページ)

【小売店—それはみなつよい酒を売っていたが—は大きな厄介物だった。売られている商品はすべて掛売で、しかもそれに大なる危険を見込むために高価であった。その品質はいたって粗悪で、しかも法外な相場で労働者に小売されていた。】(121ページ)

【貧しい労働階級の住宅は、おおむね幼い子供たちの訓練は全く適しないものである。幼い子供たちはこれらの住居の限られた広さや設備のもとでは、その親たち、すなわち、日々の仕事でいっばいな親たちにとっては、しょっちゅう邪魔になるものなのだ。】(157ページ)

【この時代の小児は六歳で綿糸・羊毛・亜麻・絹紡績工場に入るのを許されたが、ときどきは五歳で入るものすらあった。労働時間は夏でも冬でも、法律によって制限はされず、普通一日に十四時間であった。一所によっては、十五時間、さらに最も残忍強欲なものは十六時間のさえあった。—しかも大抵の場合工場は健康にわるい烈しい状態にまで人為的に加熱されていた。】(212ページ)

これらオウエンの記述から、労働者全般が怠惰で不道德であったことが理解できる。「生ける機会」の就労意欲は乏しく、人間不信が工場には蔓延していた。

労働者の食住の劣悪をオウエンは目の当たりにし、その弊害に胸を痛めていたのは、経営者オウエンその人である。

とりわけ、子どもが長時間労働については、強い問題意識をオウエンは持っていた。やがて社会を主導する子どもの疲弊は、「生ける機械」の損失を意味し、結果的に「金銭的利益」を阻害する。

後に述べるが、功利主義者であるオウエンには、「個人の幸福」への視座があった。同時に「金銭的利益」を意識する経営者としての側面が、現実を見つめるオウエンに反映されていた。

その結果、【生なき機会には大いなる注意が払われ、生ける機会は軽んぜられ、無視されている】(70ページ) ことに気づくのである。

オウエンは、「墮落した労働者」を眼前に、彼らの変革こそが「金銭的利益」を生み、よりよい産業社会の発達につながると考えた。

【世界のあらゆる部分における、人間性に及ぼす境遇の力をこのころまでに知って、私の注意は、人びとのなかに現に存する悪状態を見出し、いかにすれば最も短い時間内にその状態をよりよきものに置換えうるかに、まず向けられた。】(112ページ)

【私は自分の同胞を以て、彼らの出生の前および後の境遇によってつくられ、(中略)そして限られた範囲を除いては、みずからを支配することのできぬ生物だと考え、一それゆえに彼らの感情・思想および行動に向って無限のいつくしみをもたざるをえなかった。(中略)その結果、私の心は次第に静かに、澄んできて、憤りや悪意は影をひそめた】(64ページ)

オウエンの博愛主義は、「生ける機械」の労働ならびに生活環境の改良を背景に深化し、やがて「協同」を理念とする社会構想に発展していく。後に、アソシエーション (association) に基づく社会実験をニュー・ハーモニーにおいて実践する。

オウエンは、「人間の人間に対する愛 (人間愛・人類愛) と矛盾することなく、人間の希望、直接的には日常生活における福祉と幸福の実現」¹⁰⁾を思想したのである。

整理すると、「貧しい労働者階級の状態に同情し、自分の企業の中のみならず、社会政策立法を推進して (筆者注: 具体的には工場法制定への貢献)、彼らの状態改善のために苦闘」¹¹⁾した経営者がオウエンといえる。

オウエンにとってのファンダメンタルな課題

早くに初等教育を終え、7～8歳で助教師になったオウエンは、その後、自ら志願して呉服商 (ジェイムズ・マクガフォッグ) に年季奉公に出る。

14歳で同じく呉服商のフrint・パーマー商会に、16歳でサッターフィールドに勤めた。

オウエンは、「この奉公で私は、仕事の敏速さの、また毎日毎日休みなく長くつづいた全く勤勉の、習慣がつかざるをえなかった」¹²⁾と当時を回想している。

このような経験を通じて体得したビジネススキルをもとに、18歳の時に友人 (アーネスト・ジョーンズ) と共同で紡績機械製造工場をマンチェスターで興す。それを廃業後、オウエンは従業員を3人雇い、紡績工場を開いた。

後に義父となるドリンクウォーターから大規模紡績工場の経営を任されたのは、20歳の時である。

以上の経歴からわかるように、オウエンは高等教育を受けておらず、いわば無学であった。ジェイムズ・マクガフォッグに勤めた際、主人の配慮で読書の機会がじゅうぶん与えられていたらしいが、体系的に学問した経験はなかったといえるだろう。

したがって、オウエンの思想は、学問的基礎の上に成り立ったものではなく、自身の就労経験や周囲の意見などを吸収する中で確立されたと考えられる。

無学ゆえに、かえって学識という“色メガネ”で現実を見るのではなく、「人間オウエン」の眼差しがそこにあった。

しかし、その眼差しは、「経営者オウエン」に立脚するものであることを忘れてはならない。つまり「金銭的利益」の追求というファンダメンタルな課題が、オウエンの意識を支配していた。

ファンダメンタルな課題を問いつけた結果、オウエンは次のような認識にたどりつく。

オウエンも時代の波に乗る企業家の一人として、巨万の富を積んだ。機会の発明が、生産力を幾層倍に伸ばすことも経験した。しかし、その解放された利己的な経営が、そこに働く労働者をいかに貧困におとし入れ、いかにその性格をゆがめているかを見てとった。のみならず、その分配の不公平が大衆の購買力を失わせ、生産過剰となり、多くの企業の破産となつてはね返ってきている。本位田祥男「ロバート・オウエンと協同組合」(ロバート・オウエン協会編『ロバート・オウエン論集』家の光協会、1971年、22ページ)

つまり、「利己的な経営」が「金銭的利益」につながることをオウエンは覚ったのだ。労働者保護が、結果的に「金銭的利益」を得る最善の選択であると結論づけた。

労働時間の短縮、労働者住宅の供給、安価で良質の食料品の提供、性格形成学院での子どもの教育と養護などの一連の労働者保護対策は、「金銭的利益」の追求という経営者にとっての最重要課題に源泉するものであることを確認しておきたい。

まとめるならば、「人間オウエン」の視座は、「経営者オウエン」によって形成されていた。その意味で、「オウエンは望ましい産業社会のあり方を示した」(中川雄一郎)のである。彼は、理想的な経営者像を、自らの実践を通して世に問うたのだ。

オウエン思想のルーツ

オウエン思想は、『『人間がうけとる知識は、彼の周囲の諸対象から得られるものである』という唯物論的命題に基礎をおくものであるが、また同時に、『人間は生まれながらにして幸福をえたいとの願望を持っている』という功利主義的前提から出発している』¹³⁾と松田弘三は指摘する。

いうまでもなく、功利主義を唱えたのはベンサム(Jeremy Bentham)だ。『『最大多数の最大幸福』を原理として社会の幸福と個人の幸福との調和を企図』(広辞苑第六版)するイズムである。

つまり、「個人と社会全体の幸福が一致していれば、個人は幸福を追求し、苦難を回避するような行為をしても、人間社会の秩序は崩れない」¹⁴⁾と功利主義は考える。

オウエンは、唯物論に基づく社会観のもと、「個人と社会全体の幸福が一致」するという功利主義的立場をとった。

それは、オウエンの下述の発言に表れている¹⁵⁾。

私は支配人になった当初から、機械およびそれ以外のあらゆる工場施設ともに、住民を多くの部品から構成される一つの組織体(システム)と見ていたことを諸君は知るでしょう。また、バネや梃子や車の一つ一つと同じように、一人一人が、工場所有者にとって最大の金銭的利益をもたらす

よう有効に協同するように、その組織体(システム)の部品を結びつけることが、私の義務でありかつ関心であったことを諸君は知るでしょう。

オウエン著/白井厚訳「社会にかんする新見解」(五島茂・坂本慶一『オウエン/サン・シモン/フーリエ』中央公論社、1980年、134ページ)

唯物論と功利主義の複合的思考を基礎とするオウエンが志向した具体的な社会形態にかんして、芝野庄太郎は次の通り解説する¹⁶⁾。

オーエンが「最大多数の最大幸福」の原理を、如何なる形態をとって産業革命下の現実社会に実現しようとしたか(中略)それは、「協同と一致」の社会の実現であった。具体的には「協同体」の建設であった。この協同体は、オーエンにおいては、「貧しい労働階級の性格を根本的に改善し、また彼らの状態を改良し、生産と消費の諸費産を減らし、生産と同じ広さの市場を創出する制度のもとで、貧しい労働階級にたいし、恒久的、生産的な仕事をあたえることによって、人々の困窮を救済し、不満を除去するため」のものであった。

協同体の建設は、オウエンによって「協同村」構想として1817年に提示されている(工場労働貧民協会委員会への報告)。

それによると、500人から1500人(平均1000人)が共同して生活する施設をつくり、貧民の生活を改善し、人々に仕事を与え、子どもに教育を行うことを考えた。成員相互の慈愛をもとに、みなが労働に従事し、それによって得られた富を公平に分配することにより、「最大の幸福」を達成しようとした。

このような「協同村」が各地に設立され、それが普及していくことにより、産業革命の構造的矛盾が解消されていくとオウエンは考えていたのである¹⁷⁾。

オウエン思想の転換点

オウエンは、義父から経営を任された紡績工場で以下のような光景を目にする。

子供たちを収容する寄宿舎は、全くちがった光景を呈した。親切な持主（筆者注：オウエンの義父デイルをさす）は、憐れな子供たちに慰安を与えるための費用を惜しまなかった。彼らにあてがわれた部屋は、広々として清潔で、風通しがよかった。食物は豊富で、最良質のものであった。衣服はさっぱりと便利にできていた。一人の医者を常駐にして、病気の予防と治療を指導させた。そして土地の最良の教師を任用して、このような境遇の子供たちに有用と思われそうな教育部門を教えるようにした。親切で善良な人人を任用して、子供たちの行動の監督にあたらせた。

（中略）

しかし、このようなゆきとどいた設備の費用を弁じ、施設全体を維持してゆくためには、子供たちを夏も冬も、朝六時から夕方七時まで、工場内で働かせることが絶対に必要であった。そして、それが終わってから、教育が始められたのである。

（中略）

彼らの多くは心身とも発育不良となり、或る者は不具となったからである。日中の労働と夜間の教育はたまらぬものとなったので、多数の子供がたえず逃亡し、殆どすべての者は、七年・八年・九年の徒弟期間—この徒弟期間は一般に彼らが十三歳乃至十五歳になると満了した—の満期を鶴首して待ちこがれた。

ロバート・オウエン著／楊井克巳訳『新社会観』岩波文庫、1954年、48～49ページ

このような衝撃的事実に対して、オウエンは「そんなに年端のいかない子供たちが、食事の時間を除いて、朝六時から夕方七時まで、工場内であちどおしで働きつづけ、その後で教育をうけて大いに上達しようとは考えられない」¹⁸⁾と指摘する。続けて、「デイル氏の諸設備も、子供たちの慰安と幸福のための親切な配慮も、究極の結果においては殆ど水泡に帰してしまった」と回顧し、「子供たちをもう四年ひきとめておいて、教育を施すべきであった。そうすれば、その後生じた弊害は、いくらか防止されたことであろう」¹⁹⁾とふり返る。

オウエンの義父であるデイルは、当時としては

“良心的経営者”であったものの、オウエンは上述のような課題を身近に感じていた。子どもに安寧な生活と教育を提供するために、彼らを労働に駆り立てなければならない矛盾にオウエンは気がついた。大河内一男の言葉を借りるならば、「産業組織や企業形態や雇用関係を根本から変えてかからなければ、（中略）その枠のなかでどれほど個々の雇用条件を改善し、労働者のための福利施設に工夫をこらしてみたところで、『人間』の新しい性格を創り出すことはできない」²⁰⁾という認識をオウエンは持つにいたった。

以上を背景に、オウエンは、「人間の性格そのものを教育によって変えて、永続的に労働意欲を向上させる」²¹⁾ために性格形成学院を設立する。そこで子どもを対象とした教育さらには養護実践を、ルソー（Jean-Jacques Rousseau）の教育思想に基づいて行う。しかし、その意図はあくまでも「永続的な労働意欲を向上させる」ためであり、「金銭的利益」への帰結を前提としていた。

それは、オウエンの次の言葉に明らかである。

無知・貧困・不知・罪悪・不幸を防止せんとする実行方法によって支配しようという試みが、誠実に試みられ持続されさえすれば、常にあらゆる国民および人民を善良賢明にならせ、たえず幸福を増大さすようなことは、しごく経済的な楽な仕事だとわかるだろう。

ロバート・オウエン著／五島茂訳『オウエン自叙伝』岩波文庫、1961年、146～147ページ

義父から受け継いだ紡績工場でのマネージャー経験が、オウエンに意識の転換を迫った。眼前の児童労働者の現実が、オウエンの思想形成に与えた影響ははかりしれない。「協団体」構想への萌芽がここにあるといってもよい。

現代におけるオウエン思想の意義

歴史が実証したように「社会主義」は頓挫した。だからといって、労働者に対する搾取構造をいかんともしがたい資本制（主義）社会が優るとも思えない。その矛盾を解消するための処方箋は、オ

ウエンが志向した「アソシエーション (協同)」以外にはないと思われる。その意味で、オウエン思想は古いどころか、資本制社会の矛盾が強まっているこんにちにこそ必要である。

オウエン研究の第一人者である白井厚が「同じ職場の人間、同郷の人間、同窓の人間など協同の例は多い。しかし、異質者間の平等な協同・連帯・相互扶助こそ、今後確立すべき課題であろう。例えば、男女・老若・生産者と消費者・専門家と素人・健常者と障害者・日本人と外国人の協同などが、これからは積極的に試みられるべきである」²²⁾と述べている通り、「異質者間」のアソシエーションが、資本制社会の構造的矛盾を乗り越えていくためには欠かせない。

「生ける機械」である労働者の生活に配慮した経営は、結果として「金銭的利益」を生む。ひるがえって「生ける機械」の酷使は、「金銭的利益」の損失につながるばかりか、産業社会全体の停滞を招く。オウエンは、自らの経営実践を通してそれを証明した。

マルクス (Karl Heinrich Marx)、エンゲルス (Friedrich Engels) によって、オウエンは「空想的社会主義者」とのレッテルを貼られたが、社会主義の限界が明らかになったいま、資本制社会において搾取のないユートピアを建設するためには、まさにオウエン思想＝アソシエーションが意味を持つと筆者は考える。

<註>

- 1) 本位田祥男「ロバート・オウエンと協同組合」(ロバート・オウエン協会編『ロバート・オウエン論集』家の光協会, 1971年, 19ページ)
- 2) 土方直史『ロバート・オウエン』研究社, 2003年, 16ページ
- 3) ロバート・オウエン著／楊井克巳訳『新社会観』岩波文庫, 1954年, 164～165ページ
- 4) 土方直史『ロバート・オウエン』研究社, 2003年, 46ページ
- 5) 五島茂・坂本慶一「ユートピア社会主義の思想家たち」(五島茂・坂本慶一編『オウエン／サン・シモン／フーリエ』中央公論社, 1980年, 31ページ)

- 6) 同上26ページ
- 7) 川北稔『イギリス近代史講義』講談社新書, 2010年, 198ページ
- 8) 長谷川貴彦『産業革命』山川出版社, 2012年, 78ページ
- 9) 同上79ページ
- 10) 上田千秋『オウエンとニュー・ハーモニー』ミネルヴァ書房, 1984年, 33ページ
- 11) 白井厚『「空想より科学へ」講義』未来社, 1967年, 87ページ
- 12) ロバート・オウエン著／五島茂訳『オウエン自叙伝』岩波文庫, 1961年, 46ページ
- 13) 松田弘三「オウエン主義の成立の意義—オウエンに対する『新解釈』に寄せて—」(ロバート・オウエン協会編『ロバート・オウエン論集』家の光協会, 1971年, 126ページ)
- 14) 稲田義行『これならわかる倫理』山川出版社, 2004年, 178ページ
- 15) オウエン研究者・土方直史も同様の箇所を取り上げ、オウエン思想の功利主義的特徴を説明している(土方直史『ロバート・オウエン』研究社, 2003年, 54ページ)。
- 16) 芝野庄太郎『ロバート・オウエンの教育思想』御茶の水書房, 1961年, 217ページ
- 17) 丸山武志『オウエンのユートピアと共生社会』ミネルヴァ書房, 1999年, 34～44ページ)
- 18) ロバート・オウエン著／楊井克巳訳『新社会観』岩波文庫, 1954年, 49ページ
- 19) 同上49ページ
- 20) 大河内一男「オウエンにおける『人間』の問題」(ロバート・オウエン協会編『ロバート・オウエン論集』家の光協会, 1971年, 41ページ)
- 21) 土方直史『ロバート・オウエン』研究社, 2003年, 30ページ
- 22) 白井厚『社会思想史断章』日本経済評論社, 1989年, 193ページ

<参考文献>

「ロバート・オウエン協会年報」ロバート・オウエン協会

Fragmentary Thoughts Regarding the Ideas of Robert Owen

Akihiro YOSHIDA

The abuse of workers was prominent in the United Kingdom during the Industrial Revolution. During this period, Robert Owen, who would later be called a “utopian socialist,” adhered to the viewpoint of protecting workers. Specifically, he introduced the shortening of working hours for juvenile and child workers and founded the Institute for the Formation of Character. Robert Owen also created provisions of housing for workers and oversaw the establishment of co-operative unions.

Why did Owen, unlike the majority of capitalists of his day, adopt a management policy that took workers into consideration? This paper aims to clarify the reasons. Owen grasped that workers are part of the means of production and were “living machines.” The manager, Owen, thought that the maintenance of these “living machines” was important for “monetary benefits.” This is the primary reason why Owen paid attention to the “living machines” under his supervision.

This paper discusses the actual state of the workers that the manager, Owen, was forced to struggle with. Drawing from “A New View of Society” (1813) and “The Life of Robert Owen” (1857), both written by Owen, the paper aims to clarify his fundamental tasks, aims, and ideas.

Furthermore, in addition to catching a glimpse of Owen’s ideas, which were formed through the composite thought of materialism and utilitarianism, the paper also discusses the modern meaning of “association,” which lay at the core of Owen’s ideas.

Keywords: Industrial Revolution, living machines, monetary benefits, the composite thought of materialism and utilitarianism, association.